

## 生命倫理問題と優生学：この醜い真実、Memory Pill??

【訳者 Greatchain】James Corbett 氏の論評には何度か接して、敬意を表していたが、このように的確で深く鋭く、かつ痛快な論文を翻訳したのは、このブログでもあまりない経験である。彼は危険を避けて、日本のどこかに身を隠していたと思う。末尾に近い太字の部分だけでも読んでみていただきたい。我々がどれほど危険を知らないでいるかがわかるだろう。これは、私が2、3の先行記事で直観していたことと一致する。Memory Pill??と訳したのは私の勝手に、彼の原文にはない。誰かがビデオで言っていたことで、一錠で記憶を消す（殺す）薬ということである。そして、これを本当に「ありがたい」ことだと思わせるような医療文化が、現れる可能性が十分にあり得るということである。

コーベット氏は、優生学 (eugenics) の考えは、ナチスの犯罪によって一時は鳴りをひそめたが、しつこく現れ続けており、21世紀に最高に危険な状態に達するだろうと言っている。これは我々の世界情勢の分析で、神と悪魔のぎりぎりの緊張状態として、初めから前提していることである。我々が何かを覚悟し、目覚めない限り、この世界を改良することはできないということである。

James Corbett, BoilingFrogsPost.com

April 3, 2012

生命倫理問題と呼ばれる、学術世界の比較的知られていない領域について、一般的には、知っている人は多くないであろう。これは最初、1960年代後期に、学術的な訓練の問題として現れたもので、生命倫理とは、生物学、医学、それにライフ・サイエンスにおける、進歩した知識や、テクノロジーの発達によって出現してきた、倫理道德問題に関するものである。

生命倫理共同体の議論が、究極的に、民衆の話題のレベルにまで煮え詰まってくると、それらはしばしば、そのあり得ない可能性について、奇怪なサイエンス・フィクションのようなシナリオになってくる。[http://www.youtube.com/watch?v=1\\_-2wOnkc\\_k](http://www.youtube.com/watch?v=1_-2wOnkc_k)  
<http://www.youtube.com/watch?v=lwy-uMwCvu4>  
<http://www.youtube.com/watch?v=oP88D0UC6d0>

これらのシナリオが初めは、どれほどあり得ない、また象牙の塔のように見えようとも、これら多くの途方もないシナリオの技術が、時間とともに、ますます我々の手に入ってくることは、確かだと思われる。

しかし多くの人々が理解していないことは、人間の生命、死、健康という、最も重要な問題のいくつかが、政府の推奨する委員会に提出され、出世のための論文として、比較的名の知られない、まさに僧侶階級的な、学界権威者の手に委ねられるという危険である。

今、ますます多くの呆れるような話題が、一般大衆の間で悪名を轟かせつつある。たとえば「ニューズウィーク」のお祖母ちゃん殺し事件とか、最近の広く知られた「医学倫理ジャーナル」に載った、子供殺しの奨励とか。

<http://www.thedailybeast.com/newsweek/2009/09/11/the-case-for-killing-granny.html>

<http://jme.bmj.com/content/early/2012/03/01/medethics-2011-100411.full>

人々の多くは、「分娩後の墮胎」論文の著者たちが認めたことを、やっと理解し始めたばかりだったが、それは彼らが自己保全に用いた公開書簡による、ひどく無感動なものだった。こうした議論は生命倫理の共同体で 40 年も前から続いている。それらはやっと今になって、民衆によって消化されるほどの、既成事実になり始めている。

<http://blogs.bmj.com/medical-ethics/2012/03/02/an-open-letter-from-giubilini-and-minerva/>

<http://www.youtube.com/watch?v=cMne5cXONs0>

ビル・ゲイツの death panels (死の陪審員) への要求は、アメリカ人の大多数にとっては、並外れて恐ろしいように思えるが、こうした考え方は生命倫理の世界では、大きく主流になっている。歴史家で研究者の Anton Chaitkin が、詳しい記録文書に書いたように、生命倫理における death panels の議論は、ある非常に不穏な歴史に関わっていて、それはエゼキエル・エマヌエル博士のような人々を、20 世紀で最も残忍な事件を起こしたイデオロギーに関わらせている。(エマヌエルは、前ホワイトハウス参謀長で、現在のシカゴ市長 Rahm Emmanuel の兄弟。) 2009 年、チャイトキンは、連邦委員会の集会で、生命倫理的な安楽死の考えの歴史として、彼の研究の一部を披露したが、この考えは、高齢者から、医療手続きの基金の有利さを引き出すのが狙いだったと言った。

<http://www.youtube.com/watch?v=NrJBY2l1MQQ>

[http://www.larouchepub.com/other/2009/3624obama\\_council\\_euthanasia.html](http://www.larouchepub.com/other/2009/3624obama_council_euthanasia.html)

<http://www.youtube.com/watch?v=aW6AwOiTPno>

チャイトキンの主張は、連続したデータによって、確かなものだったことがわかり、実は、ナチの優生学運動も、現代の生命倫理という科学、すなわち eugenics (優生学) という 19 世紀のエセ科学も、共通の根源をもつものだった。

<http://www.all.org/abac/eugen02.htm>

Eugenics という言葉は、[ダーウィンのいとこ] フランシス・ゴルトンによって造語されたもので、頭の良さや道徳は遺伝するという説のことである。それは、富裕で成功した、賢い人々がそうなのは、血縁のためであり、邪悪で悪徳をもつ下層の者たちは、他の劣った者との繁殖によって、ずっとそうであり続けるのだと主張する。この考え方は自然に、後期ビクトリア朝英国の、大部分の科学者共同体に訴えるようになり、彼ら自身の特権と富に正当な理由を与えた。優生学はやがて、スーパースター科学となり、有名人や政治家や社会運動家に宣伝され、人種や階級差別的な科学的正当化を与えられた。

ナチスのために、大衆の目には、優生学の名が汚れて見えるようになった後、「アメリカ優生学協会」は、「秘密優生学」crypto-eugenics というやり方を始めた。これは、名前と優生学運動の外面的機能を変え、一方で、そのコアとなる考えと目標を維持した。アメリカ優生学協会の共同創始者 Frederic Osborn はこう書いた：——

「優生学の目標は、おそらく優生学以外の名前の下に達成されるであろう。」

こうして、優生学研究を発表するために、オズボーンによって共同出版されたジャーナル Eugenic Quarterly は、1970年に、Social Biology (社会生物学)とその名を変えた。アメリカ優生学協会は、「社会生物学研究のための協会」と再称されることになった。オズボーン自身が、「人口協会」の手綱をとることになったが、これは、ジョン・D・ロックフェラー3世によって、非白人の人口拡大の脅威を抑えるために、創設されたものだった。「優生学協会」は、その事務所を「人口協会」本部に移しただけで、2つのグループが合併した。

[http://en.wikipedia.org/wiki/File:Eugenics\\_Quarterly\\_to\\_Social\\_Biology.jpg](http://en.wikipedia.org/wiki/File:Eugenics_Quarterly_to_Social_Biology.jpg)

[https://en.wikipedia.org/wiki/Population\\_Council](https://en.wikipedia.org/wiki/Population_Council)

1968年、「人口協会」とロックフェラー一族は、Daniel Callahan が「Hastings センター」を創設するための資金を拠出した。これは、アカデミックな生命倫理研究所の最初期の、最も影響のあったものの一つで、そのフェローとして、多くの主導的な生命倫理専門家を誇り、そこにはエゼキエル・エマヌエルや Peter Singer が含まれる。このつながりは、「ヘイスティングズ・センター」の創始指導者、テオドシウス・ドブジャンスキーが、アメリカ優生学協会のチェアマン (1964-1973) であり、ヘイスティングズの創始者キャラハンが、優生学協会の所長になった(1987-1992)という事実、さらに明瞭に現れている。

<http://www.encyclopedia.com/doc/1G2-3404701079.html>

<http://www.thehastingscenter.org/About/Default.aspx?id=902>

きょうの朝、私は Jon Rappoport と話し合う機会をもった。彼は NoMoreFakeNews.com で、本を書き調査をしている、調査記者であり、対象は、アメリカをベースとする、ロッ

クフェラーに支えられた、生命倫理の「秘密優生学」の血統を研究することで、この職業を理解するようになるとはどういうことかを教えている。

<http://www.corbetteport.com/interview-488-jon-rappoport-on-the-bioethics-agenda/>

<http://www.nomorefakenews.com/>

いろんな機関が、何世紀をも通じて、どのような方法で誰が死に、誰が生きるかという質問に答えている。長期の人間歴史を通じて、その質問は、実践と伝統と文化的基準に基づく共同体のレベルで、繰り返されてきた。それは特定の歴史的理由によって、特定の人々の間で起こってきたことである。

21世紀の社会ほど、中央集権化されたやり方で、その決定が行われた時代はない。何しろそこでは、増強されて発達した医学テクノロジーが、臨床医の環境のもとに、信用ある職業医によって施され、それは委員会の法令、諸々の組織、政府の規定に合致しなければならない。大多数のアメリカの民衆の間にある恐怖——体制派の飼い犬メディアによって、直ちに、これでもかというほど笑い物にされる恐怖——は、これらの決定が、生命そのものの聖域をないがしろにする社会を、すでに作り出しており、これからもそれが続くのではないか、ということである。

子供殺しの提案、Death-panels（死の陪審員）、その他深刻な議論で、プライベートとか、メンバー・オンリー議論だとして、生命倫理アカデミアの聖なる人々の間で言われていることを聞くならば、この恐怖が根拠のないものだとは、とうてい言えないだろう。そして、生命倫理の分野と信用をなくした優生学運動の間に、証明可能な結びつきがあることを考えるなら、どのように、また、なぜ、文明の歴史で最も物理的に富裕な国、アメリカが、教師を雇う費用に対して、お祖母ちゃんを生かしておく費用をそれほど惜しむのか、その理由は全く理解できない。

この場合には、多くの他の場合のように、この議論を終わりにしたいと思っている人々は、これを公開すれば、自分たちが負けると考える人たちのようだ。

——以上